

環境利用・保全・共生の民俗知

兼城糸絵

A Study of Local Knowledge on the Utilization of Natural Environment

KANESHIRO Itoe

鹿児島大学法文学部

Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University

要旨

人と自然の関係について考える際に、重要なトピックのひとつとして災害があげられる。本年度は自然と人の共生について考えるための予備調査として、口永良部島における火山災害と地域社会の復興に関する調査を実施した。以後は、口永良部島の「災害文化」の把握ととして、火山とともに暮らす人々も自然認識を明らかにしていく予定である。

人間と自然の関係について考える際に、重要なトピックのひとつとして災害があげられる。鹿児島県の島嶼地域に関していえば、毎年のように発生する台風による被害もさることながら、火山噴火による被害も近年みられる。薩南諸島の中でも人が住む火山島は、硫黄島、口永良部島、口之島、中之島、諏訪之瀬島などが挙げられるが、いずれも現在も活動を続ける活火山であることが特徴だといえる。これらの火山に関する研究は地質学分野からの研究が中心となっているが、近年火山活動が活発化した島々を対象に、防災に関する調査・研究もすすめられてきている。

特に、鹿児島県の島嶼地域に関しては、地理的な条件から支援の手が届きにくいこともあり、島嶼ならではの災害対策の必要性が指摘されてきた。例えば、2015年1月に鹿児島大学国際島嶼教育センターおよび地域防災教育研究センターによって主催されたシンポジウム「島嶼災害の特徴と防災」でも、火山噴火や津波といった自然災害がどのように発生するのか、そしてそうした災害に対して島々ではどのような対応がとられてきたのかという報告が行われ、島嶼型の防災体制をどのように構築していけばよいのかという議論が交わされた。

確かに、自然災害から身を守るためには、災害の発生メカニズムを理解した上で効率的な避難方法を模索することも重要である。その一方で、そもそも島で暮らす人々もつ自然観や災害観を踏まえた研究も必要ではないかと筆者は考えている。例えば、繰り返し津波が起きているにも関わらず、再び海の近くで暮らすことを選択する人々の研究から、災害対応に

ついて考える上で地域社会が持っている土地や自然に対する認識を検討する必要性が指摘されている (e.g. 植田 2012)。こうしたことから、薩南諸島の島々に暮らす人々の自然や災害に対する認識 (いわゆる「災害文化」とよばれるもの) を捉えることは、今後の防災や災害復興を考える上でも必要なことだといえる。

以上を踏まえて、今年度はその予備的調査として口永良部島にて調査を実施する予定である。口永良部島も活火山を有する島であり、2015年の爆発的噴火により全島避難を余儀なくされた島でもある。まずは、現状を把握するべく、口永良部島にて簡単な調査を行い、2015年の噴火に関する情報を収集した。

口永良部島は、鹿児島県屋久島町に属する島であり、屋久島の西方およそ 12km の海上に位置している。島の面積は約 36 平方キロメートルであり、ひょうたんのような形をしているのが特徴である。島の玄関口である本村港の近くに最も人口の多い本村集落があるほか、本村の反対側には湯向集落にもわずかながら人々が生活している。2015年5月29日に口永良部島の新岳で爆発的噴火がおきてから、しばらく島外での避難生活を余儀なくされていたが、同年12月に帰島が実現している。聞き取り調査によると、噴火前には約 130 名いた人口が減少し、現在は 120 名弱ほどになっているという。島から出て行くことを選択した方の大部分は、噴火前に I ターンで島に移住してきた人であるという話が大変興味深い (逆にいえば、もともと島で暮らしてきた人はやはり島に戻ったということでもある)。

また、島には災害に関する伝承があることが確認された。特に、島の神社と火山の関係については今後も聞き取り調査を行っていく予定である。そして、歴史や民俗といった観点も含めながら、島で生きる人々の「災害文化」について検討していきたい。



写真：噴煙を上げる新岳 (筆者撮影)

参考文献・URL

植田今日子 2012 「なぜ集団移転地は海が見えるところでなければならないのか—気仙沼市唐桑町舞根の海にみる領域意識」『震災学』Vol.1 : 227-248。